至誠と慈愛の人 昭和天皇を仰ぐ

第46回歴史講演会

昭和の御代は、戦争、敗戦、占領という我国にとって未曾有の国難の時代でした。国家存亡の危機に在った日本が亡国とならなかった最大の理由、それは昭和天皇のご存在のもとに国民が一致団結して復興を成し遂げたからです。国の中心に、至誠と慈愛に充ちた昭和天皇がおられたからこそ日本国は敗戦のどん底から這い上がることが出来ました。平成23年3月11日の東日本大震災の際も、今上陛下の祈りと被災地ご訪問によるお励ましによって、多くの被災者が生きる希望と勇気を取り戻すことができました。

平成28年8月、今上陛下がご譲位の意向を表明されたことにより、現在有識者会議が今後の皇室のあり方について検討し、国会で対応策が決められようとしています。その様な大事な時だからこそ、私たち国民も皇室についてもっと関心を持ち、皇室について学ぶべきではないでしょうか。

4月29日「昭和の日」を迎え、日本政策研究センター主任研究員の岡田幹彦先生により、昭和天皇のご聖徳や日本の国柄について分かりやすいお話しをして頂きます。

この貴重な機会に多くの皆様のご参加をお待ちしております。

と　き: **5月 7日(日)** 午後2時～4時30分
受付開始13:30～

ところ: せんだいメディアテーク　7階スタジオシアター
仙台市青葉区春日町2-1　地下鉄南北線勾当台公園駅　徒歩6分

参加費:　一般　1,000円・学生無料（学生証をご提示下さい）

主　催:　宮城ビジョンの会　　TEL022(285)3383

後　援: 宮城県教育委員会・産経新聞社東北総局・日本会議宮城県本部

講師:岡田幹彦氏（日本政策研究センター主任研究員）

■プロフィール 昭和21年北海道生まれ。国学院大学中退。
学生時代より日本の歴史、人物の研究を続け、月刊『明日への選択』に人物伝を連載中。「歴史街道」「歴史通」などにも寄稿。平成21～22年産経新聞に「元気のでる歴史人物講座」を連載。全国各地で歴史人物の講演活動を行う。

■著　書　『東郷平八郎』『乃木希典』『小村寿太郎』（展転社）
『日本の誇り103人』（光明思想社）,『親日はかくして生まれた』（日本政策研究センター）他多数

私達が知らない天皇陛下のお仕事

一、国事行為

国会が指名した総理大臣の任命、内閣が指名した最高裁判所長官の任命、国会の召集、国務大臣などの任免、外国大使・公使の信任状の認証など、憲法に書かれている陛下のお仕事は十二あります。内閣の助言と承認により行われています。これら政治に関わるお仕事は、国の象徴である天皇陛下の権威によって国内外に示される大切なお仕事の一つです。

二、公的行為

国民的行事へのご臨席、国際親善の外国ご訪問などは憲法には書かれていませんが公的行為と言います。全国植樹祭、国民体育大会、全国戦没者追悼式などへのご出席、外国元首など来賓の接受、国内ご巡幸、慰霊の旅などがあります。

テレビや新聞報道で我々が目にする陛下のお仕事は右に紹介した国事行為と公的行為ですが、天皇陛下が最も大切にしておられるお仕事は実は他にあり、あまり知られていません。それは日本国と国民の平和と安寧の為に祈りを捧げる**「宮中祭祀」**です。次に紹介します。

三、宮中祭祀

皇居には宮中三殿（賢所、皇霊殿、神殿）があり、それぞれ天照大神、歴代天皇・皇族の御霊、国中の神々が祀られています。一年に約三十回近くお祭りがあり、天皇陛下が祭典を行われる大祭と、掌典長が祭典を行い陛下がご拝礼になる小祭があります。

大切なお祭りを三つ紹介します。

四方拝（一月一日）

大晦日未明より身を清め装束を身に纏い、元旦の午前五時半から天皇陛下お一人で行われます。新嘉殿の前庭で、伊勢神宮や四方の神々に一年の豊作と国の平和、国民の幸福を祈念します。長時間正座され、唱える呪文の意味は「さまざまな国難、国民の苦しみはわが身を通過しますように」という事です。

神嘗祭（十月十六、十七日）

伊勢神宮に祀られる天照大神に、その年の新穀をお供えになる大切なお祭りです。陛下は、賢所でのお祭りに先立って新嘉殿より伊勢神宮に向かって拝礼されます。

新嘗祭（十一月二十三、二十四日）

その年初めて収穫したお米を天照大神にお供えして、天皇陛下も神様と共に召し上がる皇室で最も大切なお祭りです。陛下は、皇居に水田を作られ、毎年種籾から苗を作り御田植から稲刈りまで祈りながらお育てになります。秋に実った稲は御自ら刈り取られ、伊勢神宮や皇居の神様に捧げられます。

他のお祭りにも一つ一つに真心をこめて取り組まれておられます。

昭和天皇は次の御製（天皇陛下が詠まれた和歌）を詠まれています。

日々のこのわがゆく道を正さむと
かくれたる人の　声をもとむる

国を良くするのは国民の英知の結果であり、陛下はそれが現れることを、お祭りを通してひたすら祈られているという意味です。

昨年八月、今上陛下はお言葉の中で「天皇の務めとして、何よりもまず国民の安寧と幸せを祈ることを大切に考えてきましたが、同時に事にあたっては、時として人々の傍らに立ち、その声に耳を傾け、思いに寄り添うことも大切なことと考えてきました」と述べられました。この陛下のお言葉にある「祈る」という事の意味や、重要性、日本国の国柄における位置づけは、一般の日本国民が最も知らない事です。これは、ただ単にお心の中で祈っておられるということでは無く、日本国民の先祖信仰である神社神道のトップとして、古式ゆかしい伝統文化に則って古代より連綿と続く祭祀を斎行なさっているという意味です。その儀式に際しては、事前に身を清め装束を整える等準備が大変なだけで無く、陛下は国や国民の為に誠心誠意お務めになるため祭祀は荘厳で厳正であり、常に完璧を目指されていると伺っております。

皇室ひいては日本国民の祖先である天照大神を初めとする八百万の神々、そして歴代の天皇陛下の事を皇祖皇宗といいますが、陛下はその神々と直接向き合って「艱難は全て私の身を貫き通し国と国民に安寧をお願いします。」と全身全霊で祈られるのです。まことに恐れ多く、有り難い事です。

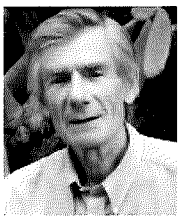
今年、皇太子殿下が五十七才のお誕生日に際して、戦国時代の後奈良天皇が洪水、飢饉や疫病の流行に心を痛められ、諸国の神社寺院に自ら般若心経を写経奉納されたことに触れられました。その写経の奥書に「私は民の父母として、徳を行き渡らせることができず、心を痛めている」と記されていたこと、そして平安時代の嵯峨天皇、鎌倉時代の後嵯峨天皇、伏見天皇、南北朝時代の御光厳天皇、室町時代の後花園天皇、後土御門天皇、後柏原天皇等が同様の写経奉納をなさっており、歴代の天皇陛下の最も大切なお仕事が国や国民の為に「祈る」事であったということに深い感慨を覚えられたとのことです。これは、ご自身の天皇陛下としてのお務めへの覚悟と御決意の表明だと言えます。

歴代天皇の国民を思う物語は、他にも仁徳天皇の「民のかまど」、元寇の時の後宇多天皇、亀山上皇が寝食を忘れて神仏に祈り続けられた話などが有名ですが、残念ながら私達は戦後教育で教わることは殆どありませんでした。

しかし、私達の日本国は、天皇陛下の祈りと、そのご聖徳と御心にお応えしようと力を尽くした国民の努力の結晶で国の平和と国民の生活を守ってきた事に間違いはありません。

世界に誇る皇室

外国の要人が日本の皇室をどの様に見ているのか一例を紹介します。



オリヴィエ・ジェルマントマ（フランス国営文化放送プロデューサー）

今上陛下ご即位十年祝賀会記念講演（平成十年十一月二十八日）より

「天皇のご存在あればこそ、日本民族は一直線に連綿として絶えることなく、その最も遠い歴史の淵源（みなもと）と今なお結び合わされているのであります。世界広しといえども、この様な国はたった一つ、日本しか無いのであります。

日本国民の統一と安泰を守る為に、日夜天皇陛下がお心を砕き、民族の偉大性をも不幸をも一身に持しておられる事を、私共はよく存じ上げております。日本の長い歴史にわたって天皇陛下は武人と歌人と神官と、身分の高低を問わず国民の頂点に立ってこられました。最も貧しい民でさえもずっと昔からこの大いなる血筋の子孫であることを誇りに思う、その様な国柄だったのです。そして、何よりも、天皇を通して日本の皆さんは『古事記』『日本書紀』の物語る神話に結ばれ、また神道に結ばれて来ました。神道なくして日本の存在はありません。」

参考文献「天皇陛下のお話」明成社